(東女医大誌　第49巻　第1号
頁　76～78　昭和54年1月)

〔学　　会〕

東京女子医大8外科合同カンファレンス抄録

日時　昭和53年6月3日（土）午後3～5時
会場　消化器病センター・カンファレンスルーム

1．頭部外傷の統計的観察

（脳神経センター脳神経外科）
○森　伸彦・杉浦　誠・横須賀麗子・
杉森　忠貫・喜多村孝一
（市立下館市民病院神経外科）河野　宏

東京女子医科大学脳神経センターにおいて，1969年より1977年までの9年間に，頭部外傷によつて入院した患者1,609例について統計をとり，近年4年間にかぎつて，その受傷機転，病態，予後の統計的観察を行なつた．入院患者数は，1972年から75年をピークに，最近は減少の傾向にある．年代別にみると，小児期の患者数が高率を占める．受傷機転は，交通事故，転落事故が多く，両者をあわせると全体の80％に及ぶ．乳児期では，転落事故がきわだつて多い．頭部外傷の病型としては，脳挫傷，頭蓋内血腫などの重症頭部外傷が50％を占めている．小児例では，呕吐，痙攣等不定症状があるため，経過観察目的で入院しているものが多く，軽症頭部外傷の占める比率が高い．小児期では脳挫傷を伴わない頭蓋内血腫の占める比率が有意に高く，成人期では，脳挫傷を伴う頭蓋内血腫の比率が高い．頭蓋骨骨折と病型の関連をみると，骨折の発生率において，単純頭部外傷および脳振盪では41％，一方，脳挫傷および頭蓋内血腫では48％と大差なく，外傷の重症度とは，十分な相関を示さない．脳挫傷を伴なわない硬膜外血腫および硬膜下血腫の機能予後は，有意な生活を送つているものが前者で93％，後者で69％と予後良好である．一方，脳挫傷を伴う頭蓋内血腫例では，死亡率40％と，予後不良である．重症頭部外傷について，年代別に機能予後をみると，小児期では，一般に予後良好であるが，死亡率に関しては，成人期のそれに近い．老年期では，正常範囲内28％，死亡率37％と予後は他の年代に比べて極端に悪くなつている．

2．川崎病冠動脈病変類似の動脈瘤の流体力学的検討

（第2病院循環器外科）
吉川　哲夫・竹内　靖夫・辻　隆之・
井上　健治・城間　賢二・徳地　孝一・
小山　雄二・成味　純・落　雅美・
小林　洋・須磨　幸蔵

われわれの教室では，川崎病で冠状動脈に数珠状の動脈瘤を認め，これを切除し，A-Cバイパスをおいて治癒せしめた経験がある．この数珠状動脈瘤が血行動態上どのような効果をもつかをモデル実験で検討した．

モデルは内径20mmのプラスチック球と内径4mmのアクリル製円管を用いて作製した．球が1球の場合と3球の場合の2種類を作り，モデルに定常流を流した．生体の冠動脈中の流速は30～100cm/sec．とし，このときレイノルズ数は300～1,500となり，これに一致するように実験条件を変化させた．さらに狭窄度を検討するために，抵抗係数を求めた．

工学的に狭窄度と抵抗係数の関係がよく調べられているオリフィスのモデルと比較すると，1球のモデルは，約50％，3球のモデルは，約70％の狭窄を示す抵抗係数を示した．

内部に狭窄がないモデルでも，狭窄効果があり，今後，狭窄と動脈瘤とが合併する場合，流体力学的考慮の必要性が十分あると思われた．

3．体外循環におけるヘモグロビン尿の防止，ハプトグロビン（Hp）投与について

（心研外科）○長柄　英男・和田　寿郎

体外循環における溶血は，術後腎不全，肺合併症，DICなどの原因となると考えられている．われわれは溶血によつて生じた遊離ヘモグロビンが，生理的な過程として血漿中に含まれるハプトグロビン（Hp）と結合することに注目し，ヒト精製Hpを投与することによ